

釣れ釣れなるままに

2014年思い出の釣行記 PART. 8

二兎を追うもの

鹿島釣狂

崩れた目論見

前回の釣遊会七月大会で、磯ブーツのフェルト底が剥がれてしまった。購入時期は平成十八年との記録がある。これまでの愛用していたモノは一万円程度の安価なものだがゴム製の紐が付いており、いちいち紐を結ぶ手間が省けるものだった。同じものが置いてあったが、ぴったりのサイズが無く、紐性のものにした。店員の「足の指先を覆う形が日本人向きで、強度のある大変優れたもので人気の高い磯ブーツ」という言葉に惑わされて買ってしまった。

また、今回の大会はタカノハを狙いの砂場としていたので、一本竿立てを用意した。今まで使用していた鉄製で赤い竿立て三本は重かったなので、大会で持ち歩くには抵抗がある。なるべく丈夫で軽いものをとステンレス製のものを六本購入した。

準備万端整えて、集合時刻ぎりぎりに市役所駐車場に着いた。しかし、バスはまだ着いてはいなかった。いくら待ってもバスは来ない。痺れを切らした幹事長がバス会社に電話すると、岩見沢に向かって出発したのだが電気系統のトラブルで江別のガソリンスタンドで修理してもらっているのもう少し待ってほしいとのことだった。しばらく待ったがバスはやってこない。次に電話した時には、代替えのバスを手配しようとしたが、運転手が出払っており、残っている者も酒を飲んでしまっているのも都合がつかないというものだ。結局、大会は中止となった。この日、来訪する予定の娘夫婦に新鮮なタカノハをご馳走しようという目論見は、もろくも崩れ去ってしまった。

勘弁ならぬというものだ。この日はすこぶる暑い日で、私は、駐車場に着いたすぐに缶ビールをプシュッと開けて飲んでしまっていた。みなさんも同じでバス待ちの間に酒を片手に釣り談義を始めていたところだった。私は、市内なので代行運転を頼んで無事に自宅に戻ることができたが、札幌からのお客さんは、酔いが醒めるまで待つしかなく大変な思

いをしたことだろう。

このバスは、曰くつきのバス会社だったようだ。二週間前にも札幌の二つの釣り会がバスを仕立てていたのだが、釣り会Aに向かっていたバスが故障したために、それに釣り会Bのバスを回してしまった為、結局、釣り会Bが中止にせざるを得なくなったそうだ。

今回用意した釣りエサをどうしたらよいだろう。明日から明後日にかけて、自分で予定していた釣り場に向かってみようか。黄金道路までには距離があるので、個人でのドライブには心配がある。近間でタカノハを狙うとしようか。しかし、明日の天気予報はよいのだが、明後日にかけては大雨洪水警報が出され波も高くなると予報され、砂浜での釣りは困難を極めるだろう。そう考えて結局諦めてしまった。カツオやコマセは狭い冷凍庫に押し込んだ。イソメには塩をしておいた。これから夏枯れを迎え、これを使うことになるのはいつのことだろう。女房には早く冷凍庫のものを片付けて欲しいと言われてしまうし……。すでに、名寄に住む娘夫婦が来訪していたので、婿さんと呑み直すことになった。タカノハの刺身はこの次の機会に振る舞うことを約束したがいつになってしまうのだろう。

今年になってから、孫の為に実のなるものとイチゴを植えていた。春に収穫したイチゴの他に四季生りイチゴが七月になっても実をたわわに付けていたが、孫が来るということで、赤く色付き始めた実を取らずに我慢していた。

「とんとん会」大会が中止になった翌日、孫を畑に連れて行きイチゴ、ミニトマト、ブルーベリーを摘んだ。ついでにインゲン豆、なすび、パプリカなどの野菜も収穫させた。しかし、孫は虫が極端に苦手らしく、畑に入るのを拒み、爺さんが抱っこしてあげなければならなかった。団地住まいで、出てくる虫に母親が黄色い金切声をあげているのを日常経験しているので、孫の方も虫に触れなくなってしまったらしい。このままでは、釣りもできない子どもになってしまう。虫を克服させるために、まずはアリンコをと手に乗せようとしたが無理だった。

その日のうちに、孫をサンピアザ水族館に連れて行った。しかし、孫はこれもダメだった。水槽の中で泳ぐ魚を見ても近づこうとはしないのだ。そこで見た50cmを超えるタカノハは、カレイのように海底にへばり付いてはおらず、鰭を打って悠々と泳いでいた。タカノハ仕掛けのハリスに筒型の発泡スチロールを付けたものが有効なのが肯ける。孫は、このタカノハを遠くから眺めるばかりで、タカノハが近づいてくるたびに後ずさりしてしまうのだ。孫を釣り好きにさせて連れまわそうとする爺さんの目論見は、^{ほかな}儂くも崩れてしまいそうだ。

タカノハ&アナゴの二刀流

八月二十一日の平日に休みをとっていた。広島県ではかつてないほどの豪雨による土砂災害で多くの犠牲者を出した。川にしようか。海にしようか。北海道にも大雨が続いた。渾水状態の川から、濁流の川となっていることだろう。天気予報では、この日だけ曇り時々晴れと出ているが、その後も雨が続くようだ。

タカノハを狙って慶能舞川河口に向かうことにした。前回、暗いうちから竿を出したので、海の濁りについては気が付かなかったが、明けてみると竿の先は泥水だったのだ。それで、明るくなってから出かけた。思った通り慶能舞川は濁流となっていた。海を見るととても釣りをさせてもらいそうにないほどに濁っている。厚賀港へと向かった。港に釣り人は誰もいない。



釣り人は私以外一人もいないので6本の竿を出した。それぞれに色んな仕掛けを付けて試してみたが、その結果は分からない。

午前六時、防波堤先端に荷物を運んだ。今日も何だか釣れそうな気配がする。しかし、アタリは出ない。午前九時、チョチョンとアタリが出た。一本バリで遠投していた竿に次から次へと糸ふけが出る。やったタカノハだ。乗った。しかし、あれだけ糸ふけを出したにもかかわらず、その引き込みは弱い。犯人はなんとウグイだった。

午前十一時に終了し、苫小牧港にアナゴ釣りに向かうことにした。途中、慶能舞川の状況を見ると、濁流に変わりはないが、河口の空地に一台の車が駐車されていた。その主は恵庭からの釣り人で、濁った海に向かって二本の竿を出していた。アタリは皆無だがもう少し粘ってみると話し始めた。苫小牧港には詳しく、砂浜に図を描きながらチカ、カンカイ、ニシン、アナゴ、クロガシラのポイントを詳しく教えていただいた。

その話の中に出てきた厚真漁港が気になったが、結局、苫小牧西港に向かった。入船公園埠頭では、宗八を狙った釣り人がいたが、その時期はすでに終わってしまったようだ。

南埠頭は外国船の入港が無く、立ち入り禁止の措置が取られていなかったの釣りが並んでいた。その中に、いかにも遠投派でビシッ、ビシッと豪快に竿を振る釣りがいたので話を伺った。「菱中造船所前でやっていたが、クロガシラ一枚で、こちらに来た。菱中造船所前はあんたが言うようにみんな敬遠しているんだよな。昔は、そこは俺の場所だからどけるという不届き者がいたらしいが、現在はみんな仲良く釣っている。」

その方が30cm程のクロガシラを釣り上げて、「いるか」と聞かれた。当人は遠投が好きで、大物のアタリやその引き込みが魅力で釣りをやっているが、釣り上げた魚はほとんど食べないと言うのだ。ありがたく頂戴した。私は自分の釣った魚はすべて持ち帰って食べてしまう。それが魚に対する礼儀だとも考えている。カジカだって面倒くさいなと思っても片付けてしまう。線虫の入ったアブラコだって煮付けで食べてしまう。アカハラだって持ち帰って、釣り餌にしたり畑の肥料にしたりしているのだ。おかげで我が家の畑は虫も多いが野菜の実りも多いのだ。その彼が「夜はアナゴを狙うが、釣れたらやるぞ」というので、遠慮なくもらうつもりだ。

その人のまわりに仲間が集まってきた。その中に昨年菱中造船所前でアナゴ釣りを一緒にした釣り人もいたので挨拶を交わした。今年の春、56cmのクロガシラを釣った年配者もいた。私の横に並んだが、八十歳を超えているにもかかわらず惚れ惚れするような立居姿で遠投を繰り返した。豆イカ狙いの釣りが立ち寄り、先日はかなり釣ったので今日はヤリイカでも来ないかと思っているとその彼に話していた。彼には人を引き付ける魅力があるのだろう。その後も仲間だと思われる多くの釣りが、彼のそばに車を横付けしては話し込んで他の場所に向かっていった。

右隣の若者が40cmほどのクロガシラを掛け、取り込みに苦労していたのでタモで掬ってあげた。その若者が魚を外すのに手間取っていると、すぐに先程の方が「割り箸はないか」と私に尋ねて、私から受け取った割り箸をクロガシラの口に差し込みクルクルッと回して外してしまった。

また、その若者が小さな魚を釣り上げて、「この魚は何ですか？」と聞いてきた。10cm程のコマイだった。その仲間と「持って帰るか」という議論になったが結局持ち帰ることにしたらしい。彼のバツカンには15cmほどのソイも入っていた。投げ釣り、ルアー釣り、サビキ釣りなど思い思いの出で立ちで賑やかに釣りをしていた。

この後、私は手の平より小さいクロガシラを釣って一応坊主は免れたが、結局、誰もアナゴは釣れなかった。タカノハとアナゴの二兎を追った釣行だったが、アカハラと木っ端クロガシラの二兎となった。

女房が新潟で開催されたママさんコーラスの全国大会に行ってしまった。新婚の頃旅行した佐渡観光もしてくるといふ。私が昼弁当を作ることになり、昨日もらったクロガシラを煮付にして職場に持って行った。そして、その施設を利用している子ども達に「俺が釣って、自分で煮付にした。美味しいぞう。」と見せびらかして食べた。なかなかの味だった。普段魚は捌くが、調理の方はしない。煮魚などは、作った事が無い。いつも女房には味が

薄いと文句を言っているが、自分でフライパンにメンミと砂糖と醤油と酒と生姜を入れて、それを沸かしてから魚を入れて落とし蓋をした。少し濃すぎたかなと自分の釣った木っ端カレイの方を味見をしてみると、いい具合に仕上がっていたのだ。

クロガシラ & アナゴの二刀流

九月五日（金）に、母の米寿のお祝いをガトーキングダムにある和食処「大善」で執り行った。母には彼女の大好きな胡蝶蘭、母がいつもお世話になっている義姉には花束を手渡した。その和食処で義姉が持ち込んだ缶ビールを出そうとすると、兄が制止し、持ち込みがよいのかを女給さんに確認している。もちろん許されるわけではなく、瓶ビールをとることになった。姉さんは困った顔をしている。兄のこの生真面目さにとれる行為やネガティブさ、そして無口な性向は私や妹も含めて三兄弟が同じなのだ。これは両親の血を受け継いできたのだろう。それぞれの連れ合いは、また違う家庭環境に育ったので三人ともポジティブで明るく活動的で自分で考えたり感じたりしたことは言動に出すことが出来るのだ。連れ合いを選ぶのも同じ性向の人を選んだのだ。ちなみに兄は登山のみ、私は釣りのみの一刀流なのだが・・・。

九月七日（日）にクロガシラとアナゴの二刀流で釣りに行くことにした。釣り新聞の菅原隆氏の記事には、八月三十日、「ハモ（マアナゴ）、急上昇」「苫小牧東港中央水路」「六人で二十四匹、今シーズン最大の釣果」との文字が踊っていた。なんでも菅原氏は、今期四週連続ボウズでアナゴの姿を確認できていなかったのだが、全員がエサ取りに難儀しながらも、のっこんできた初ハモの引きを楽しんだのだそうだ。

釣友の前野氏に電話すると、彼もこの新聞記事を目にしてウズウズしていたようで二つ返事でOKだった。どこに行くかと言う相談になり、もちろん記事にあった中央水路しかないでしょということで苫小牧東港に向かった。現場についてみると、中央水路の砂浜は、強い西風が吹いてきていたので、一本防波堤で竿を設置した。ここは風が背中から吹いてくる為、仕掛けが心地よく飛んでいき、振り込んだ後の糸ふけも出ない。

コツコツと小さなアタリやフワッフワッとしたアタリが出るものの魚が乗らない時間が続いた。ブルブルとしたアタリであがってきたのがウグイ。ダルメシアンを連れて散歩に来た釣り人が「エサにするとよい。」と言ってくれたので、さっそく捌いて切り身にした。それにクロガシラが釣れた。イソメの方にコチが来た。コチは真ガレイ狙いの余市港で釣ったもの以来だ。

右隣に入った釣り人は私たちと同じ岩見沢からだった。先週は砂浜側で六本釣ったが、風の関係でここに入ったという。なんだか見通しが明るいものになった。

女性二名を率いた若者が防波堤先端に向かった。プレジャーボートの海難事故で、立ち入り禁止の措置が取られていたのだが、ルアー竿を持ってそのバリケードを潜って先端に向かった。ソイを狙ってのものらしい。



一本防波堤にはバリケードが張られていた（ネットより）

富良野から来たという二人連れは、私たちと同じように共に四本ずつ竿を出していたが、ドジョウハモが一匹しか釣れなかったという。エンピツハモとはいわれるが、エンピツとドジョウではどちらが大きいのだろう。また、ワタリガニの足が引っかかってきたともいっているので、小さいアタリでエサをとられていた原因が分かった。その後は、引っ切り無しにエサ替えをした。

先程、防波堤先端に向かった若者達が帰ってきた。どうでしたと伺うと、さっぱり駄目でしたと女性の方が応えた。「七月に40cmアップのソイが二本釣れたので、是非連れて行って欲しいとせがむ男性を連れて向かってみたが夏枯れでだめでした。」女性二人はワームで、男性はイソメを付けたブラーで狙ったのだと言う。その女性に用を足すのに大変でしょうと伺うと、「ノシオンで平気です。ウンチだって平気です。」と自慢げに応えた。歓迎すべきことなのだろうか。少し違和感を覚えながらも、その逞しさに感心する。私だって野糞はした事が無いのだ。

結局、クロガシラとアナゴの二刀流で挑戦した私たちは、一本のアナゴも手にすることはできなかった。前野氏は、絶対釣れると確信して、途中のコンビニで氷まで仕入れて来ていたのに……。とほほほほ、泣けるねえ。



クロガシラとコチの二兎

大谷の二刀流が話題になっている。今まで十本のホームランを放ち、先日も完封勝ちで十一勝目をあげたところだ。大引のクリーンヒットで、足を痛めている中田が激走して一点をもぎ取っての勝利だった。また、中田が相手チームのセフティースクイズを好判断でバックホームして点を与えなかったことも勝因の一つだった。中田がインタビューで嗚咽までとはいかなかったが涙を見せた。「これまで足が痛いといってチームに迷惑をかけてきた。引退を表明した稲葉さんは腰が痛いにもかかわらず全力疾走している。これからも沢山の試合を稲葉さんと一緒にしたい。」というものだった。泣かせるねえ。